

劍客御劍録 外伝 直刃
譚

砂糖露草

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※この物語は同小説サイトに掲載している駄ピン・レクイエムさんの読者参加型小説『剣客御剣録』の外伝SSです。

駄ピンさん監修のもと、許可はとってあります。

本編こちら

<https://syosetu.org/novel/148394/>

あらすじ！

とある町にずいぶんと酔狂な道場があつたとき。

そこには初老に近いずいぶん粗暴そうな壮年のおっさんと、美少年と見間違う（体系的な意味で）少女の姿があつたそうなの。

このお話は剣の道を歩む少年少女の物語、の脇で起こったかもしれない小咄である。

目次

前章

出立前日

1

侍娘が行く

18

本編開始

直刃少女の長い一日

31

前章

出立前日

ここに、二人の武者が相対す。

一人は、壮年で頭を刈り上げた男、初老に入った皺の浅い肌が凄みを出している。対するは、濡れ烏と称してもいいほどの黒髪を後頭部の下の方で結えた一人の少女。その体の起伏の乏しさと勝ち気にも見える大きな瞳は好青年にも見えなくはないが、れっきとした少女である。

キツチリとした礼を互いに交わし、脇に収められた木刀を同時に正眼に構える。

開始を告げる言葉なく、ただ互いに一歩ずつ前へと進む。

すり足でゆつくりと進んでいく様は、もし観客がいればきつとその緩慢さに不平の声をあげていただろう。

それぐらい、見て退屈な一場面だ。

だが一角の武人なら、此のゆつくりとした動きの中にかくつもの攻防が入り混じっていることに気付くことだろう。

彼ら、否。壮年の男は少女の動きを予測して、わざとわかりやすく迎撃の意志を気当

たりで飛ばし少女の動きを抑制していたのだ。

しかし少女も負けじと出来得る一手を模索し試しながらじりじりと自分の間合いまで距離を詰めていく。

その様はさながら陣取り合戦、もしくは詰将棋に酷似していた。

そして、ついに少女の刃が男に届くまでの距離まで達した。

刹那少女の剣が横薙ぎに振られる、男の胴体を切り伏せんとする鋭い一撃だった。

しかしそれは難なく防がれた。刀でうまくいなされ体勢を崩すための一手となり、少女を襲う。

男女の力の差だけではない、巧妙な捌きによる流れの改変。

相手の特徴を闘いの中でよく知り、かつ一部の極めた武人にこそ許される妙技の一つ。

それをこの男性は力量の差こそあれど、まるで子供に見せつけるようにこなして見せた。

そのままでは綺麗に地べたへ崩れ落ちるだろう、だが、少女はそれを良しとしない。

無様でも滑稽でも、彼女は大地を踏みしめ前へ進もうとする。たとえどんなに体勢を崩されようともだ。

そして、立ちふさがるモノはすべて叩き斬る。

それが彼女の戦であり、人間骨子でもあった。
今回も同じだ。

崩されても絶対に転ばないよう大きく踏み出し、その足を軸と見立て体を回して重心を整え―振り向きざまに鋭い一閃。

その刃は―

「また負けて…：しまいました…：」

床に頭と膝を投げ出し、少なくとも女子、いや人が人前でしちゃいけない無様をさらす女子の姿がそこにはあった。

彼女の名は『直井漸』

腰まで伸ばした濡れ烏色の髪を後頭部の下の方で一纏めに結えた、先程まで道場の中で鎬を削っていた女侍である。

結果は、先程の彼女の言とその無様な姿から容易に想像できるだろう。

「俺に勝とうなんざ20年はやい…：カッカッカ！」

そう高笑いを挙げるのは先程彼女と相対してい壮年、どちらかと言えば初老に限りなく近い男性。

名を『直井成正』

この道場の持ち主であり、そして『一刀』流『摩穿』派初代師範でもあった。

そして、少女『直井 漸』は此処の道場の一番弟子なのである：多少込み入った事情があつて書類上では違つたとしても、師と弟子がそうだと思つているのだから、それでいいのである。

閑話休題

「てか、漸よオ：負けるのは別にいいとして、その散り様は流石にねえんじゃねえの？」
 体と恥とその他諸々をかなぐり捨て投げ出した体勢で突つ伏す弟子、それを見た師である成正は深々と溜息をもらす。

あの攻防から立て直し激しい打ち合いをしていたためか、道着ははだけあられもない姿を現している。

：まあそもそもポーズが滑稽なのと起伏の乏しい身体では色気もへつたくれもありはしない。

さつさと立ち上がれと顎で促す師匠にそれにこたえようとする弟子。

ふんぬぬぬぬ、とかぐぎぎぎぎとか乙女から出てはいけない言葉が出ている気がするが気にしては負けだ。

それからしばらく経たぬうちに、少女は動かなくなる。

「師匠、直は先程の稽古で精根尽き果てたみたいです。立てません」

大真面目で凜とした声で言い放つ少女、顔もどこか凜々しいのだが、だが姿勢が（r
y

この体たらくに成正はまた深々とため息をつく。

師としては全力を出してくれるのは嬉しい限りだが、そんな無様は見せてほしくない
ので心境複雑であつた。

そんな彼は頭をかきながら、漸にゆっくり近づき手を貸して楽な体勢に助け起こす
と、

「立てるようになったら居間にきな、昼めしがてら大事な話があるからよ」

とだけ言い残し、さきに道場を後にするのだった。

「話…いつたいなんのことだろう？」



さて、場面は切り替わって件の居間へと視点を移す。

そこには先に道場から抜けた成正の姿があり、その前には成正が直々に作った料理の
数々が並んでいた。

そう、男の手料理である。だというのに色鮮やかで栄養への気配りも申し分ない出来
であつた。

「失礼します、……お待たせしてすみません師匠」

遅れてきた漸が静かに襖を開け、ふと耳についた昼餉のかほりに前におかれた膳に視線を移した。

そして、申し訳なさそうに目を伏せる。

「師匠、やはり飯仕度は直すくに任せていた」

「駄目だ」

「何故!？」

飯仕度を師匠にやってもらっている心苦しさに、何度目かの提案をにべもなく断られる弟子。

その師成正は、厳かな雰囲気をかもしだし、弟子の提案など寄せ付ける気など更々ないようだ。

「あそこは俺の戦場だ、お前だろうと勝手はさせせん」

「ですが、師に世話される身にもなってください!」

「じゃあひとつ聴こう。漸よ、おめえさん今何を作れる?」

師の問いかけに、漸は一度考えに更ける。

そして、自信をもって意気揚々と答えた。

「雀の丸焼きと山菜のおひたしです!」

「てめえ料理なめとんのかあ！」

「な、でしたらカエルとネズミの取り方もわかります！」

「サバイバルと一緒にすんじゃねえよ！せめて包丁使う料理くらい言え剣士なら！」

ぜえ、ぜえと息を荒らげる成正。

このやり取りでわかるように、漸は料理の腕もからつきしであった。

剣士なのに包丁を使えば指を切ってしまうくらいに、料理と言われてゲテモノに行き着いてしまうくらいに。

彼は心のなかで自分の弟子に厨房を任せてはならないと改めて心のなかに誓ったという。

とはいえ、このままでは本題に入れない。そう思った成正はまず息を整えゆっくりと腰を下ろした。

「まあいい、座れ。せっかく作った飯がさめちまう」

「は、はい。では」

「いただきます」

食物への感謝を捧げ二人同時に箸に手をつけた。

かたやごく当たり前のように咀嚼して、もう一方は目を輝かせながらもがつつかない程度に箸をひるげに伸ばす。

後者が弟子である漸なのだが、料理はできないなりに食という文化を楽しむことはできていた。

そんな折である。

「ときに漸。料理もそうだが、おまえ剣以外にやつてゐることはあるのか？」

そんな師からの問いかけが投げられた。

漸は不思議に思いながらも当然のように答える。

「いえ、なにも。この身は未熟なればこそ、一振りの刃になるよう精進している最中ですから。」

その顔はやや誇らしげで楽しげであつた。対する成正の苦い顔と対になるように。

「あー、そりやあ確かに殊勝なことだけどよお？お前さんは人間なんだ、ダチと剣以外で遊んだり競つたりするだろうよ」

「」

「おい、何で黙る。」

今度は弟子が苦い顔をする番だつた、苦い通り越して青くなり冷や汗がたらたら垂れ流していたりする。

「え、ええと。何でもありませんよ？ええ、直は人気者ですから友達だつて百人いますし」

「なら、その友達の名前言ってみやや、俺は優しいからなその四分の一でいいぞ？」
優しいと言うが、それでもまだ鬼畜である。

少なくとも一クラスの過半数以上が友達であるといっているようなものだからだ。

……え？普通じゃないのかって？ H A H A H A そんな馬鹿な。

とまあ、そんなボツチ思想はさておき。

これには困窮するかと思われた漸だが、ことのほかその口から悠長な言葉が流れ出てきた。

「それでは、『祐吾』『弥太郎』『晋介』『安平』——」

これにはさしもの成正も仰天する。

なにせ師匠としての視点から見ても、確かに人気はあるが普段から時間があれば素振りか刀の手入れしかやらない娘子だったからだ。

だというのにさらさらと人の名前を読み上げていくではないか、少なくとも覚える程度には人づきあいをしているということ

最愛の弟子の成長は、成正にすればくるものがあつた。

いつの間にか親離れしていく、子離れできない親の心情もあつたのかもしれない。

おもわず目からほろりと——

『『弾正』『紫』——』

「いや待て、おい、おいッ」

―涙が引つ込んだ

詠唱が中断された漸は面白いほどにきよどつている。

「な、なんでしようか」

「さっきの奴お前が拾ってきた刀につけた名じゃねえか!? いやよく考えりや徹頭徹尾聞き覚えあんぞ主に銘としてな!」

成正の鋭い指摘、きゆうしよにあたった!

漸は明らかに堪えている。先程から流れる冷や汗が今では滝のようだ!

対する漸は起死回生を試みて、例え話を始める

「その…『刀はともだち』といいますし…」

「刀はサッカーボールじゃねえし、その友達をバンバン折ってるのはどこのどいつだよ」
しかしそこで成正のカウンターが綺麗に決まった!

―そう、彼女は道端に落ちていた魔刀を拾ったり、買い手のつかない刀を二束三文で手に入れてくるのがよくあった。もはや趣味とか日課に近いものだ。

しかもその一つ一つに固有の名前を付けるほどに大切に手入れをしていたのだ。まるでポッチのイマジナリーフレンドのように、イマジナリーフレンドのように（大切な

ことなので二回言いました。)

しかも必要とあらばボツキリ折ることも厭わない！それが友達のやる事かよオ！
漸選手！これはもう（二重の）意味で立てない！

弟子一号（）のめのまえがまっくらになった。



「そういや、漸。お前今いくつになった？」

そんな今までの惨劇が何事もなかったように成正是問いかけた。

その問いに若干ふてくされながらも、彼女は素直に答える。

「歳のことでしたら、直はいま15ですが」

成正是「そうか来年から16か…」と確かめるように相槌を打つと、しばし考えに耽った。

そして、空気が一転して張りつめたものへと昇華する。

「漸、お前にはこれから暇を出す」

「それは…『破門』、ということですか…？」

さきほどのおふざけとは比べ物にならないほどの冷たい汗が、漸の背中を伝っていく。

彼女はお世辞にも才能があるほうとは言えない。齡15を過ぎた乙女がまともに包丁を握れないのも、今の今まで無銘の刀たちしかまともな友達がいなかったのも、その才能の不足を補うために犠牲にしたようなものだった。

だがしかし、そのことに未練はない。だからこそ道半ばでの『破門』^{させつ}ほど恐ろしいものは無いのだ。

それが敬愛する師からの最後通告だとしたらなおさらである。

それでも彼女は凜とした姿勢を崩さない、そんなことは師に限って絶対には信じ／＼するでいつかは来るものだと思っていたかのように。

対する成正是はゆっくりと近づき漸の目の前まで来て、頭を軽く小突いた。

「そこは普通『免許皆伝』だろうが、安心しろ今のお前じゃどっちも程遠い代物だ。」

そう言って笑いかける師を見て漸の緊張がゆっくりと弛緩していく。思ったよりも重い話じゃなかったと安堵の息も漏らした。

話がそれてしまったので彼は一旦区切り、小さく咳をする。

そして話題を切り出すように口を開いた

「『東学園』は流石に知ってるよな？」

「ええ、それなりには。東と西に分かれて『学生剣士最強』を競い合っている剣術学校で

すよね。ですが未熟者の直にはそれこそ無縁だと思いますが……」

「お前、そこに通え」

「は？」

「推薦枠が一つ余ってるらしくてな、無理やり勝ち取ってやった。だから行ってこい」
横暴である。

何がって見た目に合って粗暴な師が無理やり勝ち取ってきたというのだから、一体何をしたのか想像に難く無いし、その決定に自分があらがえないことを彼女は知っているからだ。

だが、彼女は行きたくなかった。

その肩はこれからの不安と寂しさに震え、顔はずっと下を向いたまま。

自分には不釣り合いだ、敬愛する師匠の顔に泥を塗るような無様をさらすのでないか。そしてそこには自分を守ってくれる人が誰もいないという事実。

そんな弟子に成正是優しく、しかし強かに説き始める。すべては大事な一番弟子のため

「いいか、漸。お前はこの5年で確かに強くなった。見違えるほどにな。だがこのままじゃ殻は破れんだろう」

「つまり、そこに通えば強くなれる、と」

「さあな、ただここにこもってちやあ、一生そのままだ。それに――」

「それに――？」

「きつとそこに通えばいろんなものが見える、見えちまう。今まで見落としてきたもの、見てないふりをしてわざと取りこぼしたもの。だが、それらはきつとお前のためになるモノだ。それを手に入れる。三年間の最重要課題だ。」

「それが、なんなのかは直には教えてもらえないんですよね」

「それも含めてだからな、ま、なんだ。思いつきり無様に負けても気にすんな。俺がその様見ても大爆笑するだけだ」

「酷いですね」

「カツカツカ。お前の師匠はそういう男よ」

そう言つて今度は優しく頭をたたく。

子供をあやすように。

やがて

「わかりました。『一刀』流『摩穿』派一番弟子、直井 漸。行つてまいります。」

そう、決意を現した。その瞳に怯えはあつても迷いは、もうない。



「旅支度は大丈夫だな？」

次の日の早朝まだ日が昇り切ってない頃に、漸は慣れ親しんだ故郷を旅立つことにした。

支度をしていたらいつの間になつていたことと、今から向かえばちようどいいころ合いに目的地に着くからだ。

着替えや寝具、そして剣士に欠かせない刀たち

「そうだな…そんな多くても全部ボンクラじゃなあ…。あとで漸のためにイイのを見繕って送ってやろうか？」

漸の腰に数本、そして背負い鞆に十数本刺さっている無銘たちを見た成正の正直な所感だった。

それに対して彼女はふるふると首を横に振る。

「いや、然しなあ。お前さんの『人生』を使うたびに替えてまた新しい無銘刀を探すのほねだろう？ 探しゃあ「いいんですよ」」

今度は成正の言葉にかぶせるようにして、話を止める。

そして漸はおもむろに腰にさしてある刀たちをポンと叩きこう語った。

「この刀たちにも情が移ってしまいましたし」

それに、と彼女は続ける。

「もしお師匠様の刀を折ってしまったら、それこそ直は立ち直れなくなります。」

悲しそうな、何かを隠しているような面持で。

何かを言つてやるべきだというのは、成正にもわかつていたのに言葉が出ない。

言おうとしている言葉がどこかずれていて、でも何がずれているのか分からない。答えられない。

だから口から出たのは外れてはいない、されど正解からほど遠いもの。

「—そうかい。ま、欲しくなったら文でも電話でもしてくれや。漸にピツタリの奴を選んでやるさ。いや、一から作らせるのもいいな。」

「ふふ、その時はよろしくお願いしますね。」

今はこれでいい。

少なくとも一時とはいえ別れに辛気臭い話は不要。

笑つて送り出してやることこそが一番の手向けだ。

「それでは、行つてまいります」

「おうよ、身体には気を付けてな。拾い食いすんじゃねえぞ」

「師匠こそ、お酒は控えてくださいね」

互いを気遣う会話を最後に、彼女は歩き出した。
背が見えなくなるまで見送っている師から離れて

小さな鳥はいま巣立つ

侍娘が行く

さて、（作者含む本人たちの）涙を誘う別れを体験してきた主人公、

名を直井 漸という。――少女だったが、いまそんな彼女はどのようにしているのかというと学園に向かう道中であつた。

……既に予定した時間を過ぎ去つたあとにもかかわらず。

何故、こんなことになつたのか。

ちやうどそれを彼女も思い起こしていたのでそれに便乗させてもらおう。

――そう、それは予定通り近場の大型客車――俗にいうバスのようなもの――乗り場に着いたときのことだつた……。

「――これが師匠のいつてた大型客車の定期便ですね。車自体は今まで何度も見ただけではありませんが、中に入ったことはないんですよ……」

そんなおのぼりさん全開の発言をしているのは他でもない漸である。

彼女は今まで道場とそこから徒歩で行ける近隣の町しかいつたことがないため、公共機関の類いを使うことがなかった。

発言の通り大型客車に乗るのは初めてだつたりする。

そんなこともあり、少しだけ楽しみでもあったのだが――

さて、いまの時刻は早朝の朝日が顔を出して少しした頃。

この時間帯、どの公共機関でも春夏秋冬ほぼ確実に起きるはた迷惑な風物詩があるのをご存じだろうか。

おそらくある一定の年齢層より上でかつある島国の出身なら一度は経験したことがある。

そして、誰もが出会したら辟易するであろう朝夕のイベント。

そう、

『通勤氾濫』――いわゆる通勤ラッシュ……である。

「ほらもつと詰めて！そこ空いてる！」

「ヤベ、押され過ぎて吐きそう。」

「ちよつと！誰かお尻触ったでしょ！」

「年寄りを労らんかいこの若僧どもお！」

喧々囂々、阿鼻叫喚な光景が漸の目の前に広がる。

しかもお国柄ほとんどの者が帯刀しているため、いつ一触即発な状況になってもおかしくなさそうな状況である。

——一応乗車になる際はバスの上か下に作られている荷物置き場に刀も一緒に置くことが義務付けられているが。まあ、気休め程度だろう。

そんな有様を見て、さつきまでのうきうき気分が一気に急降下。

顔をひきつらせ、今からこの中に自分も入ることを考えて顔が真っ青になっている。

しかしその場で立ち往生はできない。

何故なら彼女の後ろには既に行列が出来てるからだ。

このままでは迷惑がかかる。

即決即行動が肝心なこの場面で彼女は――

「あ、どうぞお先に。直のことはお気になさらず。」

後ろの人に順番を譲り、そのバスを見送ることに徹したのだった。

人混みになれない田舎娘には少々刺激が強かったらしい。

である。

次の大型客車は当分先、そこで彼女は考えてしまった。

—これはもはや、歩いていった方が早いのではないか？—

無論、そんなことあるわけではない。

彼女だって、本心で思っているわけではないだろう……たぶん、メイビー。

しかし、「またこの待ち時間で人が増え、挙げ句次の大型客車もぎゅうぎゅう詰めだったらどうする？」

乗るの？ すし詰め状態で目的地まで行くの？ というか行けるの？ 逝くの？」

という、対人恐怖症でも発症したような自問自答を繰り返した挙げ句。

「うん、きつと徒歩でも問題ないな！ 『官東』までならちようどいい鍛練になりますからね！」

現実逃避と脳筋理論が合わさり最強に見える（違）

少なくとも漸にはそう思えたようだった—。

なお、この時間につくよう調整していたのは他でもない、師の成正であり、その心得は「すこしでも人に慣れさせねえとなあ」という面白半分通勤ラッシュの親心から。

更にいうと、丁度次の便から通勤氾濫通勤ラッシュが緩和されて座れるかどうかまでになるのを、成正は知っていたのである。

まあ、そんな救済措置はまだしも通勤ラッシュという存在事態あまり詳しくない彼女には、成正の気遣いなど半分も理解できなかった。

更に道にも詳しくないものだから迷子になって『東学園』にはたどり着けませんでしたとさ。

） F i n

◆
うん、すまない。それだとタイムパラドクスが起きてしまうから、ただの冗談なんだ。本当にすまない。

しつかり迷子になりはしたものの、それこそ道行く人に訊ねればいいだけだからね。人っこ一人通らないわけでもなしに、その考えに至った彼女は早速近くに人影がないか辺りを見渡した。

すると――

「犯人に告ぐ！今すぐ人質を解放し投降しなさい！もうすぐ応援も到着するからな！」
「うるせえ！さっさとこっちの要求を聞きやがれ！人質がどうなってもいいのか!？」

「助けて貴方あ!!」

「つく。卑怯な！人質などとらず正々堂々とかかってこい！」

……先ほどとは様相の異なつた修羅場が展開していた。

というか、今回のやつの方が正当な意味に近いだろう。

十名ほどの素顔を覆面で隠した、帯刀している男衆。

そのうちの一人に取り押さえられている武装解除された身なりのいい女性と、その対岸で身を案じている台頭している夫と思わしき人物。

そして、その両者を隔絶するように配置されている『御用引き』が一人。

よくドキュメンタリー番組などで取り上げられる、凄惨な事件現場（生）がそこにはあつた。

どう見ても『御用引き』側の旗色が悪い。頭数的にも状況的にも。

それがわかつているからか、それとも人質がいるからか強引な手段をとれずに硬直した状態になつていた。

これには漸も苦笑い、する間もなくその場から姿を消す。

逃げたのではない、犯罪者たいていしょうの首級を取りに行つたのだ。

狙いはいま人質をとつて覆面の男。

漸は心のなかで師匠成正の教え復唱しながら目標へと駆ける。

——『この流派はな、元は戦で大将首を挙げるために俺のひいひいじいさんが編み出した戦術を元にしてるんだよ。』

『戦場で、ただ必死に大将首だけを夢見て、決して『不転』こころはず前に進む、それがこの『摩穿』派の始まりだったわけだ。』

『歩方や対一戦術なんかは俺があとから編み出したものなんだよ。どうだ、凄いだろ！』
『んん！それはそれとして。おまえさんが世間に出れば、いろんな戦いかたをするやつと出会うだろう。』

『早いやつ、図体のかいやつ、若しくは頭数揃えて総出でかかるやつもいる。特に最後は摺り足でチマチマやつてたら日がくれちまう。』

『というわけで、だ、お前さんにはこれから『走法』を教えてやろう。なあにちよいと足腰の力が必要だが、要は慣れよ。』——

「『刀を『霞構え』に持ち替え、出る足と同じ肩を前に出す。そして、足でしつかり地面をつかみ、姿勢を低く保ちながら倒れるように—』」

走る。初速は遅く、しかし倒れこむような姿勢のお陰で勢いがまし、だんだんと早くなっていく。

『業術』と呼ばれる妙技の中に『縮地』と呼ばれるわざがある。

間合いを一瞬で詰めるいわゆる瞬間移動に近い移動術である。

その『縮地』に最高速はもちろん初速も及ばない彼女の走法だが、一点だけ特筆すべきものがある。

それは—

方向転換が『縮地』よりも自在であるということ。

「ふぎやあ!？」

「おい、後ろからなにか来てるぞ!侍か!？」

最初の接敵をすれ違い様に斬り伏せ、始めに人質を解放すると、速度を下げることもなく次の賊へと向かっていく。

異変に気がついた彼らは、突如割って入った乱入者に一瞬だけ慌て、すぐに迎撃の構えをとった。

四方八方から彼女を斬り伏せんと襲い掛かった。

迫りくる敵を遮蔽物と捉え、素早い動きで射線上に敵の仲間が来るように移動しつつ、すれ違い様に斬り伏せすぐにまた次の遮蔽物の影へと移る。

ときに真横へスライドするように、ときにジグザグと曲がりくねりながら、ときに逆方向へ唐突に方向転換するなどして、賊を切り捨て進んでいく。

やがて、最後の一人を見事切り伏せ一言。

『武術の基本は足と腰。大地を制する者は勝敗を決する』。師匠、直は無事やり遂げました。」

そうつぶやいて、自らを教え導いた師匠に静かに感謝の念をささげた。

そして、遅れて応援にやって来た『東奉行』衆のもと全ての賊が拿捕され、人質も目立った怪我はなく家族との再会を果たした。

こうして、ひとつの強盗事件は未遂に終わったのである。

……で、である。

事件の早期解決はまあいい。誇るべきことだ。

だがしかし、彼女の目的は『官東』へと至ることなのだ。

それはできるだけ早い方がいい、しかしこんな大々的に事件を解決してしまったら待ち受けるのは――



「で、嬢ちゃん。そんな大荷物もって、しかも刀を十本以上ぶら下げて、何してたんだい？」

「そ、それは、直の師匠から、『官東』にある『東学園』に向かうようにと言われたからで……」

「ほーん？でもここより前に大型客車の停留所があつたはずだが？」

「そ、その、大型客車の中がパンパンで入れそうになかったので、歩きで行こうと……」

「へえー、こつから『官東』の『東学園』まで、歩きで？」

「は、はい、直は足腰には自信がありますから……」

「そう言う問題じゃない気がすんだがなあ」

そう、事情聴取である。

近くの奉行署内にて彼女は管轄の同心から事情聴取を受けていた。

いきなり現場に乱入してきて賊を次々となぎ倒していく侍娘が怪しくないわけがない。

まあ、怪しいは怪しいが、潔白であるのは自明の理である。

その事情聴取事態、すぐにかたがついた。

「いやすまねえな、長い時間拘束しちまつて。感謝はしてるし白だつてのもわかっちゃいるんだが、これも仕事の一つなんだわ」

そういつて申し訳なさそうに頭を下げようとする同心に、漸は慌てて止めにはいる。謝意を表されることに關して単に胆が小さいからだ。

それを謙虚と受け取ったのか、その姿になにかを思い出したのか同心は唐突に口を開いた。

「そーいや去年の今頃も同じようなことがあつたなあ」

「同じようなこととは？」

「お前さんみたいに現場に現れては賊どもを叩き潰してく輩がいたんだよ。ただその場合俺たちが介入する前に終わらせて姿を消すから、正体がわからずじまいでなあ」

「あ、もしかして直が呼び止められたのも其が原因でしょうか？」

「それもあるし、『廃剣』の可能性も考慮して、だな。ま、両方とも宛が外れたが。」
そういつてタバコをふかす同心。

漸は去年自分と同じことをしたとされる剣士に思い馳せた。

きつと高潔で、人徳のある立派な人物なのだろう。そんな人にいつか手合わせを願いたいとも。

そんな彼女たちの邂逅は、また別のお話。

なお、

どこから嗅ぎ付けたのか、現場近くに訪れていた記者により顔と戦闘風景を激写されてしまい、

翌日の新聞記事にあることないことかかれた上で一面を飾ってしまったのは（当人以外には）どうでもいい余談である。

因みに

「で、お前さんこれからどうする?」

「少し遅くなりましたが、このまま『官東』目指そうかと野宿にはなれてますし。」

「慣れる慣れないの問題じゃねえだろ、そこは。……仕方ねえ近くまでパトカーで送っ

「てってやるよ」

「本当ですか!?!ありがとうございます!」

と、こうして目的地までの足を確保することに成功した漸であった。

本編開始

直刃少女の長い一日

今日はなんて日だろう。

したり落ちる汗と血を拭いもせずに、少女は思う。

途中まではいつも通りだったはずなのに、ここまで乱されてしまうのはなぜなのだろうか。

心も、身体も。

その原因を探るべく、彼女は今日という始まりの一日をさかのぼっていく――。



その日、彼女はこの町に来て初めて友人である空木山茶花に会いに行くついでに、彼女が働いている甘味処で舌鼓を打とうと足を運んでいた。

その際にふと目に映った『廃剣』と呼ばれる賞金首の手配書に、彼女は特別な感慨も
なくただ

「そんな人もいるのだな。まあ私には関係のないことですが」

とだけ一瞬思い、すぐに頭の隅へと追いやった。

この時は、これから堪能する甘味への魅了と、山茶花と何をしようかという予定の算段に思考のほとんどとられていたこと。

そして彼女自身には『廃剣』に対する特別な感情など持ち合わせていなく、それこそ「指名手配されているなら悪いやつなのだろう」という大まかな考えしかもっていないことがあげられる。

要は、そこらの剣客と『廃剣』を明確に分けて考えていなかったともいえよう。

この猛者だらけの『官東』なら、きつと早いうちに手配書がはがされているだろうなと考えるのみだった。

「いらつしやいませ。何名様で…ゼンさんでしたか」

白髪の髪を長く伸ばした病弱にも見える白い肌の少女―山茶花が、漸の顔を確認して静かに微笑む。

それにこたえるように漸も朗らかな笑みを称えながら口を開く。

「こんにちは、サザンカさん。席は空いてます?」

「勿論、いつもの席でいいですよね?」

まるで常連のような対応。実際、漸は山茶花と知り合ってからこの店を良く訪れるよ

うにしている。

単に彼女にとつて親しいと思える人物があまりいないためでもあるし、彼女自体が無趣味に近いたため時間が有り余っているからでもある。

お金がないときは時折臨時のお手伝いとして訪れることもあった。

今回は客としてと、友人の家へ遊びの誘いに逝ったというのが強い。

「ええそれで。あ、そうだから時間取れますか？」

「あと少ししたら一度上がらせてもらおうかと思つてたところですよ。」

「じゃあそれまで待つてますから。食べ終わつてからいつもの、やりましょう？」

いつもの、という四文字であらかた片付いてしまふくらいにはそれは常習化しているようだった。

ちなみに内容は「軽く手合わせしよう」といったものである。

約束を取り付けることに成功した漸はまた仕事に戻る山茶花を見送り、いつもの席へと座りただ静かに待つことにした。

時間にしてそこまで長い時間がたつていたわけではない、しかしお預けを食らう子供の様にはやる気持ちを必死に押さえつけ座して待つているとついにお目当ての人物が現れる。

「あ、サザンカさん。やつとききましたか…あれ？お客さんですか？」

「はい。ですので、少しお待ちください」

漸は山茶花が二人の男女―おそらく年上―を自らの後ろの席へ案内しているのをさりげなく見る。

その所作や佇まいからただものではないのは明らかだ。

それ自体は別に特筆すべきことではない、なぜならこの首都において自らより格上な人物などそれこそはいて捨てるほどいるだろうから、少なくとも漸はそう考えていた。ただ何故だろうか。

彼らが現れてから、どうも背中が無凶痒い。

まるで獅子に狙われる兎のいたたまれなさを彼女は感じていた。

その原因は明白なのだが、とはいえないきなり難癖をつけるのも躊躇われる。

山茶花も働いているお気に入りのお味の甘味処で、営業妨害になりそうなことはしたくないしと、ここは見えて見ぬふりに徹した。

いまは、仕合より甘味の気分なようだ。

しかし、そんな安穏とした時間は唐突に終わりを告げる。

「ちよつといいい?」「ちよつといいいか?」

背中越しに発せられた、二つの呼び掛けによつて。



呼び掛けていた二人が自らの通う学園の中でも指折りの強者であることを知ると、一にもなく手合わせの誘いに乗り、経験と縁をもうけることができたのは僥幸だった。

後にも、その時にも漸自身がそう感じていたのは確かだ。

その後の廃剣『深淵』との遭遇も、渋谷章と退避した先で死合うことになった『参蔵』戦もこれからの飛躍に一步買うだろう。

全体的に見れば、不謹慎な感想としては充実した一日であったと思っていた。

だが、すべてが終わった直後（いま）はどうだろうか？

乗りきった安心感や、壁を一つ越えた達成感は鳴りを潜め、ただただ心身ともに疲労困憊してその場で立ち尽くすだけだった。

渋谷二年がその場をあとにしてから暫くたった今でも、彼女は動けずにいた。

ざらつくような凝りが心に滞留して、平時の思考を鈍らせる。

人が死ぬところを直でみたからか？

否、最強の剣客を目指す傍ら人斬りになる覚悟などどつくのとうに済ませている。

それに、この世界が人命の軽い世界ということは何年も前に、彼女自信が体感していたことだ。

斬り結んだ数を誉れとし、その際に落とした命へ最大の敬意を払う。それこそが彼女

の流派の理念のひとつでもある。

それでも心がざわつくのは、最強と詠われた少女の涙。

その意味が計り知れなかったからで。

かける言葉もなかった己の不器用さを無意識に恥じたからかもしれない。

同年代との人付き合いがまれであつた彼女には――。

「あれ？もしかして、少し遅かつたかな」

唐突に建物の影から、また別の少女の声が聞こえてきた。

するとどこから現れたのか、いつのまにか漸の前に黒髪を肩の辺りでざっくり整えた少女が現れる、そして『参蔵』の亡骸を繁々と見つめていた。

その事に漸は驚きつつも、思い当たる節があるのか声をかけた。

「あ、あなたは……浅野、さん？」

その言葉に人懐こい笑みを浮かべながら、少女は答える。

「大丈夫だった直井さん？でもすごいね『廃剣』の一人を真つ向から破るなんて。間に合わなかったのが残念だけど」

アハハ、と笑いながらのたまう姿に漸は少しのうすら寒さを覚える。

先程まで対峙していた『廃剣』と似た空気を感じた様だ。

「でもやっぱり、満身創痍みたいだね。命に別状はないと思うけど念のため病院にはいった方がいいと思うよ？」

そんな剣呑とした空気を打ち消すように、彼女―浅野桜は漸のボロボロの体を見て氣遣つて見せた。

真に相手のことを思っているのが分かるほどに、彼女の眼差しは不安と慈愛で満ちているのがみてとれる。

先程感じた狂気はいつの間にか鳴りを潜めていた。

「―そ、そうですね。ご忠告通り、病院によらせてもらいます。」

浅野の心配は正しい。

実際にいまの漸は立っているだけでも精一杯で、傷も浅くなく（おそらく極度の疲労によるものだが）軽く目眩もしていた。

きつと、先程感じた狂気も立ち眩みの末に見た白昼夢だったのだろうと、ひとりでに納得するくらいには。―それでも、しこりのような違和感についてまと割りついてくるが

しかしその不安を払拭するように、浅野は生来の甲斐甲斐しさを發揮し始める。

「うんうんそれがいい。でも君一人じゃ危なっかしいし、僕もついていこうか？」

気さくに気遣う姿には、もう先ほどの違和感さええない。

ここまで来てようやく漸は一息つく。

というか、そろそろ限界に近いことも拍車をかけて浅野を全面的に信頼することに決めたのだ。

「それはありがたい……ですが頼まれてほしいことが」

「ん、なにかな？」

「……足腰にうまく力が入らなくて。できればその、病院まで担いで行ってほしいのです……」

「……へ？」

「あと病院に行く前に、つれて行ってほしいところが」

「君わりと図々しいね！」

注文の多さにブー垂れながらも優しく運ぼうとしてくれる辺り、浅野の人のよさが垣間見れる。

ついでに、漸少女の図々しさも強調されてしまっているような気もするが、まあ問題ないだろう。

そこでふと、思い出したかのようにあざとく言葉を漏らす辺り人使いも荒いようだった。

「やや、実はこのあと加勢に来てくれと頼まれてまして……」

「よし行くよ！まだ凶悪な『廃剣』がいるかもしれないからね！」

そして、その言葉につられた浅野女史は手のひらをきれいに返して、漸は俵担ぎにして走り出していく。

いったい何が彼女をそうさせるのか、それは漸にはわからない。

なお、当たり前のことだが彼女たちが急行したときには既に事がすべて終わったあとで、その影すらなく。

現場のままで同い年の少女を担ぎながら項垂れる女学生の姿があったといううわさ話がまことしやかにささやかれたという……。